

平成24年4月8日

〔本則〕  
舉ぐ。法眼、脩山主に問う、「(毫釐も差あれば、天地懸かに隔る)と、汝、作麼生にか会す?」(誰か敢て動著せん。)脩云く、「毫釐も差あれば、天地懸かに隔る。」(百草を鬪わしむるに、甚麼の難きことかあらん?)眼云く、「恁麼なれば、また争でか得ん?」(鉄山が横たわつて路にあり。)脩云く、「某甲は只だ此の如し、和尚はまた如何ん?」(鼻頭を捩転た。)眼云く、「毫釐も差あれば、天地懸かに隔る。」(将に謂えり、別にありと。)脩、便ち札抨す。(錯を將つて錯に就けり。)

〔示衆〕  
衆に示して云く、一双の孤雁、地を搏いて高く飛び、一対の鴛鴦、池辺に独立する。箭鋒相い挂うことは則ち且らく到き、鋸解秤錘ぬ時は如何ん?

## 従容録に学ぶ (五〇) 第一七則 法眼毫釐



龍泉院  
参禅会会報

本誌第九号「地蔵親切」(平成九年)以来、久しぶりに法眼さんの登場あります。法眼文益(八八五~九五八)は唐末から五代という時代に生き、禪門五家の一つである法眼宗の開祖とされる重要な人物です。南京の清凉院で禪風を掲げ、当時の吳越国王から篤い帰依を受けました。その門流は一〇世紀に浙江・福建を中心に発展しましたが、宋代には急速に衰退した宗派であります。

この「法眼毫釐」は、法眼さんが弟子の脩山主に教えた機縁。機縁の「本則」も万松さんが後につけた「示衆」やコメントも、みな達意的なルビを付しましたから、表面上の意味は読めば分かりますね。でも、故事をたくさん下敷にしていますから、それを知らないと本当の理解は不能。そこで、まず難語の解説をしましよう。



これを察し  
た。

た飛衡も同時に弓を引いた。すると、相方か  
らの矢鋒は空中で当つて落ちた。名人同志の  
妙用とはかくのことし、という喻え話。

また「鋸解秤錘」とは、昔のハカリに用い  
た分銅をノコ切りで引いても歯がたたないこ  
と。つまり、スキがなく手出しのできない喻  
え。ですから、この〔示衆〕で云わんとして  
いるのは、法眼さんの力量にはスキがなく、  
とても手出しができんようだが、それをどう  
会得すべきかな、ということ。

つぎに「本則」ですが、ここでは両者が問  
答を交す「毫釐も差あれば天地懸かに隔る」  
という言葉が眼目。この言葉は、禪宗第三祖  
僧璨大師作『信心銘』の初めにある有名な語  
句なのです。意味は、ごくわずかなちがいで  
も、それを延ばしてゆくと天と地ほども隔つ  
てしまふこと。また、万松の「百草を闖わしむ」  
は、草でスモウをとらせる子供の遊び。本物  
ではない茶番劇ですね、「鉄山……あり」と「鼻  
頭を捩転す」は、ともに力のあるさまを評し  
たコメント。「錯を将つて錯に就く」とは、  
あやまりをすなおに認めず、強引に自己主張  
に変えてしまうこと。耳が痛いですね。

これでもう、「本則」も意味はとれますね。  
ところが、禅問答は枝葉をとり扱つてあります

すから、情況判断を補つて理解しないと、そ  
の奥深いところには届きません。初めに法眼  
が脩山主に「毫釐も……」の深意を聞いた。  
この脩山主は紹脩という名の僧で、後に龍濟  
寺（江西省吉安市）で道場を開いていますか  
ら、ことによると法眼がこの寺に行つたとき  
の問答だったのかも知れませんね。

さあ、では本モノとは何でしょう？ それ  
は、「毫釐も……」という中心テーマを全身  
でどう受けとめるか、に尽きますね。そこで、  
改めて『信心銘』の原文にかえつてみますと、  
本モノはちがうぞ、というのです。

とまれ、

聞かれた

山主は、

同じ言葉

をオウム

返しにし

て答えた。

それは子

供の遊劇

に等しい

と、万松

さんのコ

メントは

私たちには、便利さや快適さを「良いことだ」と盲信したツケの報いを、今さまざまなかた  
ちで受けています。同じように、原発に対し  
ても基本的な理解さえもせずに、いたずらに  
『安全神話』をまかり通させたために、いま  
や国の将来をもゆり動かすようなリスクに直  
面しています。私たちは、今こそ「眞実」に  
対するマッサラですなおになり切つた態度と  
心の確立に、いつそう努めたいものです。



法眼が住した清涼寺(1980年現在は公園)

# 四〇周年記念行事の円成

龍泉院 住職 椎名 宏雄



昨平成二三年は、当寺参禪会の発足四〇周年を記念して、幾つかの記念行事が催されました。回顧しますと、当参禪会では発足二〇周年以来、節目ごとにさまざまな記念行事を行つてきましたが、四〇周年行事では、従来と異なる二つの特長がありました。それは、新しいイベントと、すべて当山を会場としたことです。



ご老師のご提唱を目を凝らし耳を傾けて拝聴

昨平成二三年は、当寺参禪会の発足四〇周年を記念して、幾つかの記念行事が催されました。回顧しますと、当参禪会では発足二〇周年以来、節目ごとにさまざまな記念行事を行つてきましたが、四〇周年行事では、従来と異なる二つの特長がありました。それは、新しいイベントと、すべて当山を会場としたことです。

新たなイベントとは、五月の眼藏会開催であります。眼藏会の由来について一言しますと、この聞法ともいべき修道行事は、明治三八年に曹洞宗大本山永平寺で、丘宗潭老師を講師として開催されたのが始まりで

す。これは、七〇日間にわたる大法筵でした。以後、永平寺では今日まで継続していますが、期間は三週間程度と短くなっています。

歴代の講師には、秋野孝道・岸澤惟安・原田祖岳・山田靈林など、長らく『正法眼藏』を参究された「眼藏家」といわれる、錚々たる名士が名を連ねています。現今では、永平寺以外に各地の大藍名利などでも時折り行われていますが、講師は必ずしも当代一流の眼藏家とは限らず、大学教授などの場合が多くなっています。

参會者五〇名の皆さまは、みな真摯に目を凝らし耳を傾けてくださいました。かくしてわずか一日間だけの延べ六時間あまりのミニ眼藏会は、むしろわたくしのほうが大いに勉強をさせていただき、会員諸氏に助けられて無事に円成できました。

会員さんの熱意といえば、開講式・閉講式の法要では、特訓によつて鍛えた居士分限の方々が諸役をみごとに務めたことに象徴され、一般参加の皆さまから感嘆と賞讃をいただいたことでした。

公開講演会は、従来二回にわたって催した「禅をきく会」に比較すれば小規模ではありますたが、当初予定していた先生の四大ご不調による急拵変更という事態がありました。幸いにも、曹洞宗総合研究センター所長池田魯參先生のご来駕により、難なきを得ました。

しかも、ご講演は仏教の基本思想たる「縁」について、先生は深い学殖にもとづいた平易でやさしい語り口によつて、七〇名の聴衆に深い感銘を与えてくださいました。先生には会員一同とともに心から感謝申し上げます。

一一月三日の在家得度式は、新受一三名、再受一〇名、合計二三名の方々が真摯に行修されました。新たに仏道を歩み精進を重ねることの誓いは、ともすると我欲に走り世間に流されやすい人間にとって、大切な宗教的機縁であります。特に新受の二三名の方々には、今後の私生活はもとより、サンガの一員としてのご活躍が大いに期待されます。

また、かつて会員の中から出家した伊藤幸道君が、今回は市原市林泉寺住職という資格で随喜してくれたのも、うれしいことでした。当日の午後、わたくしが限られた時間の中でお話した「説戒」はお恥ずかしい内容でしたが、これまたわたくし自身の勉強であり、ありがたい自己反省のきずなとなりました。

さて、以上の記念行事がすべて当山で行修することができた要因は、数年以前に完成した山門頭の駐車場です。これで旧駐車場と合わせて約五〇台の駐車が可能になり、近辺の道路面を使うと百台ほどが駐車できます。し

かし、これでも大きな集会では狭いため、将来はさらに拡張したいと念願します。ともあれ、右の行事では会員の乗合せなどで台数を減らし、遠来の一般者を優先して混乱を避けました。

かくして三つの記念行事が無事に円成できたのも、二二年春に立ち上げた準備委員会の力によるものです。各行事ごとの小委員会による責任分担制はもとより、月一回以上の全体会による鳩首熱論を重ねて万全を期し、文字



早春の淡い光の中で地鎮式が執り行われました

通り衆力和合したサンガの総力による円成であります。準備委員会は発足当初から、かねてよりの念願であった坐禅堂の建立を視野に据えて、諸行事執行と並行して資金の勧募を行つてきました。その結果、当寺檀信徒に対する依頼はしなかつたにもかかわらず、会員はもとより、当寺にご縁のある多くの方々からご協賛ご支援をいただき、続々と淨財が寄せられました。お蔭さまで建立の目安が立ち、測量・用地造成・工事契約と進み、今や上棟式が目前という段階に至りました。なんと有難いことでありましょうか。淨財ご寄進の方々には、ただただ感謝感激の念でいっぱいあります。

いうまでもなく、完工とその運用に当つては、まだ多くの難題が横たわっています。しかし、わたくしは会員の皆さまと一丸となつてこれらをクリアーし、鋭意竣工に向けて努力を惜しまぬ覚悟です。無魔完成し運用体制が整つて、はじめて記念行事の大円成となることを確信いたします。

合掌

# 第三回在家得度式

仏弟子として  
日々精進努力を誓う



晴天に恵まれた昨秋一一月三日、龍泉院参禪会四〇周年の行事の一環として、第三回在家得度式が行われました。在家得度式は一〇年ごとに行われています。

第一回在家得度式は二〇年前で、二一名の方が得度されました。第二回目は一〇年前で、三〇名の方が得度されました。その内初めて得度された方は二一名で、再度得度された方が九名でした。今回は二三名の方が得度され、その内初めて得度された方は二三名でした。従つて、これまで三回の在家得度式を通じて安名を授かった方は、五五名となりました。

在家得度式は、在家の人が出家者に準ずる修行者になるための儀式で、釈尊から代々伝えられた教えに準ずることを誓い、その証として絡子・安名・血脉を授かり、今後は仏弟子として日常生活の中で、精進努力することを誓うものです。

## ■嚴肅に得度式挙行

午前一〇時に維那兼堂行役の林泉寺住職伊藤幸道師を先頭に、戒師を務められる椎名老師、侍者の永野さん、侍香の加藤さんが入堂され、開会式が始まりました。因みに伊藤幸道師は元参禪会員で、第二回在家得度式で得度された方です。

開会式でご老師から、「これまで三回の得度式を行い、五〇数名の方が在家得度されたことになりますが、在家得度式はこれで最後になります。今回初めて得度を受けられる方も、これが一期一会、最後と一期一会がぶつかりあつて、実のある有意義な得度式にしたいと念願するものであります」とのご挨拶がありました。

続いて小山齋さんが法弟代表として、「参禪の動機はさまざまですが、毎月の坐禅、口宣、ご提唱など、ご老師から直接・間接の薰陶を得て発心し、今日の得度式で受戒することになりました。このような在家得度式に巡り合えたことは大変幸せなことです。ご老師、得度式宜しくお願ひいたします」とのご挨拶がありました。

午前一〇時四五分から得度式が執り行われました。奏楽が奏でられる中、戒師様を務められるご老師が入堂、上香・普同三拝した後、戒師様による佛祖の降臨証明を請する奉請が行われ、続いて二三名の得度を礼讃する文が奉読されました。

次いで洒水灌頂、剃髪、安名・絡子授与が行われ、その度ごとに、一人づつ戒師様の前に進前叉手・長跪合掌して、浄水を受け、剃

刀を当ていただき、安名を告げられ、絡子を首にかけていただきました。

その後、搭袈裟の偈を全員で唱和し、十六条の菩薩戒を戒師様の後に続いて唱和し、最後に戒師様から大きな声で「能く持つや否や」と問い合わせられ、全員で「能く持つ」とお答えして、授菩薩戒が終わり、これで晴れて正式な佛教徒になることができました。

さらに血脉授与に移り、一人づつ戒師様の前に進前叉手・長跪合掌して、お血脉をいただき、小畠二郎さんが得度者を代表して、次のような佛教徒となつた誓いの言葉を述べられました。

「我々法第一同は、釈尊から道元禪師様へと脈々と伝えられた正伝の仏法を全身全靈で授かり、菩薩戒を堅持し、仏弟子としてのご縁を生涯に活かし、日々誠心誠意仏道に精進努力することを誓います」

### ■戒律を守るとは

午後一時からの説戒では、ご老師から「戒律」について次のお話をされました。  
まず戒と律については、「宗教には戒律があり難いものと思われていますが、道徳とは違ひ戒律は自分だけのものです。また〈戒〉と〈律〉とは別のもので、〈戒〉はサンスク

リット語のシーラを漢訳したもので、身を律する定めや掟のことです。〈律〉はビヤーナ

を漢訳したもので、元来は取り除くという意味です。悪いものを取り除くという意味です。お釈迦様が使われた〈律〉は、教団運営上の障害となる悪いものを取り除く掟でした。」と述べられました。

確かに人間が集団を運営するには、運営上の障害となる悪いものを取り除くルールが必要となります。ルールに関連して、ご老師は巨大津波に襲われた石巻市で、避難民を受け入れた洞源院について、次のようなお話をされました。

「洞源院は石巻市の高台にあり津波の被害を受けずに済みました。住職の小野崎さんは津波に襲われた後、すぐにお寺を避難場所として開放したところ、被災者が多い時は四〇〇人も駆け込みました。最初の一週間は孤立し、支援物資が届かなかつたので、備蓄のお米をお粥にして分けあつたそうです。小野崎さんは避難生活三日目ぐらいから、共同生活のルールが必要だと痛感して、『約束八ヶ条』を提案しました。

一、みんなで元気に挨拶しましょう。

二、履き物を揃え、整理整頓・清潔に心がけ

ましよう。

三、何事もお互いに譲り合い、協力し、マナードを守りましょう。

四、天気の良い日は、日光浴と散歩をしま

う。

五、わずかな物でも分け合いましょう。

六、自分のできることは何でも手伝いまし

う。

七、神仏を敬い、感謝の心を常に忘れないようになります。

八、生活に必要な規則を作り、皆で守りまし

ょう。

このような人さまを先にしようという「自

未得度先度他」の心を、避難生活の基本とされたのです。避難民の中には震災で親を亡くして孤児となつた子もいましたが、大きい子は小さい子が重いものを持つていれば手伝い、脱いだ靴はきちんと揃え、揃つていなければ靴を揃えました。一人ぼっちの子を見つけると、遊びの輪に入れてあげました。元々は知らない子ども同士でも、自然と助け合うようになつたそうです。

人間の集団にはルールがなければバラバラになつてしまいますが、人は極限になつても人を先にたてようとする気持ちがあるのです」

と、戒律に関連してこのようなお話をなされました。

さらに十重禁戒について、それぞれ詳しいご説明がありました。私どもの最も関心の高い不酔酒戒については、禁酒を意味するものではなく、お酒を造って売るなどという意味であります。要は酒を飲み過ぎて、精神的な異常をきたすことがないよう、心がけることであるとのご説明でした。禁酒しなくてもよいとのご説明に、飲んべーとしては一安心したところです。

最後にご老師は十六条戒を守り持続していくには、良いことを習慣づけ、習慣的に戒を保つようになります。

もう自分の命は何日もない時にはどうするか、明日はどうなるかわからないという無常観を持つ。

の二点をあげられました。このお言葉を肝に銘じ、仏教徒として日々精進していきたいと思っています。

■仏弟子となつて

説戒が終わり、閉会式に移りました。ご老師と小畠代表幹事から祝辞をいただき、最後に刑部一郎さんから、法弟を代表して次のよ

うな謝辞がありました。

「これで公に仏弟子となることができました。この日を迎えたのも色々なご縁のお蔭だと思います。坐禅を毎月行うことが習慣化し、徐々に仏道が心の中に浸透し、その結果、椎名老師から得度を受けることができました。大変喜んでいます。今日のご老師の説教でお話しされた教えを持続して守り、微力ですが社会に貢献していきたいと存じます。本日は本当に有難うございました」

これで得度式も無事円成し、茶話会ではご老師から今回授けられた安名について解説していただき、真新しい絡子を付けられたお一人お一人からは、得度された深い思いを語つていただきました。

就職して世間の荒波に飲み込まれると、毎日の生活に追われて忙しく、四〇年が過ぎ去り、その間に宗教に触れるのは葬儀のときくらいです。定年が近くなつて、定年後の生活で何を行うべきか考えた時、真っ先に思いついたのが参禅でした。青春時代の参禅への思いがよみがえつてきました。

## 赤い線でつながつて

鎌ヶ谷市 小山 齋

平成二三年一一月三日、龍泉院にて在家得度しました。

得度式は開会式、得度式、記念撮影、点心、説戒、閉会式と厳粛に執り行われました。得度式の酒水灌頂、剃髪、安名・絡子授与、授菩薩戒、血脈授与は身がひきしまり、小畠二郎さんによる法弟代表の誓いの言葉を聞い

て、法弟子としてこれから精進するぞ、との思いが大きくなりました。

私が禅に興味を持ったのは、高校時代に自然との共生について考えたり、「無」「〇」に接した時でした。無とは、〇とは何か、何冊かの本を読んだ覚えがあります。そして、生死について考え、自殺について考え、私見を投稿したこともあります。参禅も考え、品川区豊町の東照寺さんに出向いたこともありますたが、実行には至らず、悩み多き青春でした。

龍泉院に上山したのはそんな二〇〇三年一月です。上山して八年。毎月、坐禅を組んできました。その間、口宣、ご提唱とお話をいただきました。その間、口宣、ご提唱とお話をいただきましたが、何も覚えていません。お話の中身はわかるような気もしますが、身につきません。私は頭ではなく、体で覚えるしかない

明先生の言葉を借りれば、明らかに観ることでしよう。

参禅して坐禅をし、法話を見聞き、老師から薰陶を受け、坐禅会の皆様のご指導によつて変わりました。今は今しかない。ひと時でも止まることはない。過去は過ぎ去り、未来は見えない。今しかないとわかれれば、今を大切にしなければ。それは未来を見据えての努力です。そう考えるようになりました。

上山当初、先輩方が肩に掛けていた袈裟、その裏に書かれていた安名とはいつたい何なのか。なんとなく様になつてゐるな、あれは何時もらえるのか。貰う資格は。貰うとどうなるのか。まったく分からず、なんとなく格好がいいなと思つていきました。

参禅会発足四〇周年記念行事として、第三回在家得度式が開催されるのを期に、在家得度のお誘いを受け、説明を頂き、その意味合いが分かりました。椎名老師の法弟子となる

坐禅をして何が変わつたか。以前に比べ過去に執着しなくなつたことでしょうか。これは、諦めではありません。日々、一瞬一瞬を大切に過ごすことによつて生まれる心境だと思つています。過ぎ去つたことをくよくよしても、もう戻れない。その時々で、努力を惜しんでいなければ悔いは残りません。奈良康



法弟を代表して挨拶される小山さん

のか心配でした。しかし、努力目標として日々勤めると解釈しました。

これで先輩諸氏と同じように、坐禅の折には絡子を掛けられると思いました。そして、式が終わり御血脉袋から血脉を開いた時です、佛祖正傳・血脉・菩薩大戒と書かれた大きな血脉に、釋迦牟尼佛大和尚から始まって、多くの和尚が赤い線で繋がり、大心宏雄和尚に繋がっています。そして次に戒光齋心居士とありました。これこそ私の安名です。

そして、尚、驚くことには、戒光齋心居士から釋迦牟尼佛大和尚に、その赤い線が結ばれてゐるではありませんか。なんと言つたらいいのでしょう。驚きです。もう後には引き下がれません。仏教徒として邁進する所存です。

老師と私は、師僧と弟子の法縁で結ばれました。師の教えを守り菩薩戒を守り、精進努力いたします。

ご老師、先輩諸氏宜しくご指導のほどお願ひいたします。はて何発目の発心か。

式が進み酒水灌頂、剃髪、安名・絡子授与は勿論緊張しましたが、授菩薩戒では守れる



## 「能く持つや否や」

—龍泉院参禪会 在家得度式に参加して—

柏市 石原 良浩

龍泉院参禪会に通い始めて一年を経て、迷

うところもありましたが、このたびの在家得度式に参加させていただきました。

なぜ迷うかと言えば、日頃世間の垢にまみれ「罪惡深重」「煩惱熾盛」を身の上とする私が、戒を授かっても容易に守れる筈がありません。

しかし椎名老師のご提唱で「信心が篤ければ自然と戒律も保たれる」との話を聞いて心和らぎ、また「戯笑のために袈裟を著せる、なおこれ三生に得道す」という因縁を思い出して、思慮を超えた功德にあやかりたいという気持ちも手伝つて、申し込みに至りました。得度式当日、二〇余名の参加者の末席に坐らさせて頂き、式の進行に注目しながら、最初の得度式のあつた年を思い出していました。

二三年前の平成元年、その頃わたしは、医師であり且つ禪を指導していた「岡田利次郎」先生について、まさに火が出るように坐つておりました。岡田先生は安谷白雲老師の法嗣として「担雪会」を主催し、多くの弟子を育

てられましたが、中には私と同年代の者も多々、青年部のような集まりが別に設けられ、毎水曜日は泊りがけで坐っていました。当時の独参でのやり取りは、今もわたしの血肉となつて生き続けております。

最初の得度式はその「担雪会」の主催で、四国の中崎通元老師を戒師様として招聘し、大宮の興徳寺でとり行われました。小柄な老師の姿と、本堂の中心に釈迦の苦行像が鎮座

していましたのを、今でも思い出します。一方、安名・緒子・血脉授与などの場面は茫洋として記憶が定かでなく、授菩薩戒において「能く持つや否や?」「よく持つー!」と言ったことだけが、鮮明に記憶に残っています。

それから幾星霜を経て、龍泉院において二度目の得度式に参加する機会を得、今まで椎名老師から戒を授けていただきました。

果たして戒を受持するとは如何ん。

六師外道の一派であるジャイナ教では「不殺生戒」を守るあまり、空気中の生き物を吸つて殺さないように口にマスクをつけ、地を這う虫を踏んで殺さないように、いつも簫で前を掃き清めながら歩いたと言います。

奇しくも私の長年の友人が昨年の六月、教師の道を捨てて、スリランカに旅立つてきました。上座部（テーラワーダ）仏教の師の下で出家するためで、今はニッサラーナバナヤ（日本語で「出離の森」と呼ばれる山深い僧院で、二五〇の戒律を忠実に守つて暮らしています。

人は仏戒を授かる前から、「こうしてはいけない」「ああしてはいけない」「こうすべきだ」「ああすべきだ」と、自らの戒を課しそれが苦しみにもなつております。



洒水灌頂を受ける石原さん

「衆生近きを知らずして 遠く求むるはかなさよ」とは、白隱禪師のお言葉ですが、額面通りに受け取るものではないでしょう。されば乾坤一擲、正身端坐して仏祖正伝の直法を現前せしむることが、「それ」にはかなりません。

改めて頂いた血脉を拝見すれば、釈迦牟尼佛から椎名老師を通じて脈々と流れる血筋と共に、釈迦牟尼佛から直接伝わる血筋が加えられており、心打たれます。しかもこの度は、かたじけなくも袈裟まで新調していただき、今年の寒さはひとしおですが、気分は春の陽気のように晴れやかです。

「形質は草露の如く、運命は電光に似たり」。

私も既に人生を折り返した感があり、いつ「二つの眼たちまちに暗くなるべし」となるかかりません。椎名老師、龍泉院参禅会の皆様につき従い、坐禅に励み、悔いなき時を過ごせんことを願うばかりです。

## 受戒　— 仏弟子となつて —

八千代市 山本 聰

私が参禅をしようと思つたきっかけは、ある日突然自分の心が浅ましく、荒れるに任せている事に気付いてしまつたからです。



剃髪を受ける山本さん

五〇歳代の先輩社員の不注意極まるミスでとばつちりを受け、腹立ちまぎれにその人を汚い言葉で思い切り罵倒してしまいました。そして私は自分自身に愕然としてしまいました。人を妬み、嫉み、何となく世を拗ね、牙を剥ぐ先があれば獸のように囁みつく、そんな私は何と惨めな人間なのだろう…。出世欲や財産欲は少ないつもりでしたが、無意識下ではそうした欲望が執念深く燻っていたのです。

そんな時に、たまたまテレビで宮崎奕保禅師のお姿を拝見し、私は非常に感動しました。僧堂で大衆と一緒に坐禅をする禅師の坐相に、峻厳さと同時に万物を包み込み赦す、暖かさのようなものを感じました。しかし、そのときには宮崎禅師は遷化された後でした。宮崎禅師が仰るよう、坐禅をしてみよう…。やがて、私は總持寺で広く一般向けに日曜参禅会を開催しているということを知り、参禅をするようになりました。そして、平成二年一〇月二四日の月例参禅会から龍泉院参禅会で、坐らせていただくようになりました。

椎名老師の真摯で分かりやすいご提唱を拝聴していると、不思議と続きが聞きたくなり、いたある日、私は仕事中に、ミスの多い龍泉院にすっかり落ち着いてしまいました。

参禅を続け、老師のご提唱を拝聴し続けてい  
るうちに、私の中にはあつた浅ましいものは、  
何だか影が薄くなつてきたように思います。

人と比べっこをし、むしり合いをする事の馬鹿馬鹿しさが、ようやく本当にわかつてきました。そうすると、仕事にも前よりも真摯に取り組めるようになってきました。仕事をする事もまた禅、仏道なのでしょう。

そして今回、龍泉院参禪会の四〇周年記念行事として、在家得度のお話があり、私のような者が…、という思いもありましたが、これもご縁と思い受戒申し込みをお願いしました。

流轉三界中 恩愛不能斷  
棄恩入無為 真實報恩者

戒師・椎名老師と皆でお唱えしたこの偈文は、何故か私の心中に深く残りました。確かにこの偈の通りです。業が断ち切れないばかりに、生まれ変わり、死に変わつて今の自分なのでしょう。

また、椎名老師の説戒の中で、  
戒を守る秘訣は無常を常に自覚すること

・ 忍辱こそ最良の修行である（釈尊も常にこれを心がけて修行された）

# 第二十九回 成道会 円成す

道元禪師の在家の見系として、龍泉完准名を  
仏弟子としてはまだ未熟ですが、釈尊  
何だかやる気の出る、励みになる言葉でした。

道元禅師の在家の児孫として、龍泉院惟名老師のもとに集まる「サンガ」のうちの一人として、しつかり修行を続けていきたいと思います。

けた方や、ご家族の介護で生じた人生上の重大な悩みを問い合わせた方などがいらっしゃいました。約一〇名の方がご老師と問答にあたられました。問答の次にご老師から法話を持ちました。成道会では毎回、曹洞宗で活躍された偉

い方々のお話をお聞きしていますが、今回は、戦後の曹洞宗の名僧中の名僧と呼ばれている、渡辺玄宗禅師様についてのお話でした。

渡辺玄宗禅師は明治一三年に新潟県三島郡日吉村鳥越（現在は長岡市）の青柳家の二男として生まれました。本が好きで、特に仏教書を読み漁り、その結果、雲照律師として有名な真言宗の高僧に憧れ、出家したいと思うようになつたのです。満二三歳の時、このまま嫁さんを貰つて指物師で一生を過ごすなら、なんと詰らない人生かと思い、意を決し書置きをして家出したのです。

色々なお寺を泊まり歩き、あるお寺で紹介された長野県佐久町にある泉龍寺に行き、入門を求めて三日間坐りこみ、ようやく許されて出家することが出来ました。安名として本行玄宗を受けられましたが、さらに住職の渡

辺俊龍老師の家に入籍して、渡辺玄宗と姓名とも変えました。

泉龍寺で本格的な仏道修行を始め、基本的な仏教の勉強をした後、二八歳の時、富山市の修行道場である光嚴寺に移り、三六歳まで八年間修行僧として過ごしたのです。

三六歳の時、初めて永平寺に入門、二年間修行し、この間、眼藏会などがあり、大変打たれるところがありました。その中で、玄宗禪師は自問自答して、「自分は頭が悪いから、とても学者にはなれない。自分は口下手だから布教師にもなれない。残るは坐禅をするしかない」という結論に達したのです。永平寺時代に生涯坐禅に生きる覚悟を決めたのです。

五九歳になつた昭和二年に、金沢市大乗寺の住職に迎えられます。大乗寺時代は、七日の間の接心を「接心、接心、また接心」と言われるほど、繰り返し行い、一七年間での接心回数は数えきれないほどです。「坐禅をしたい人は大乗寺に行け」と言われていたそ�です。昭和一九年、七六歳で大本山總持寺の第一七代禪師様に迎えられ、八九歳までの一三年間、戦中・戦後の一番大変な時に、貫首を勤められ總持寺を死守されました。

戦後になり、荒廃した總持寺を復興するため私財を投じ、伽藍の修復だけでなく、人材の育成にも力を入れられました。いつの時代

も、良い人材がいれば、荒廃してもたちまち復興することが出来るのです。要は人材なのです。このことは東日本大震災にも言えるのではないかと思います。

八九歳の時、能登にある總持寺祖院に隠居しましたが、大衆一如、雲水と同じ生活をされました。また荒廃していた祖院にも、私財を投じて復興に努められました。

大乗寺、總持寺、能登祖院の復興を成し遂げ、人材の育成に努められた渡辺玄宗禪師は、九五歳で眠るがごとく示寂されました。

まさに法を重んじ、行を実践する人でした。

玄宗禪師のお弟子さんは今ではいらっしゃいませんが、孫弟子としては、板橋興宗禪師や東隆眞老師がいらっしゃいます。以上が渡辺玄宗禪師についてのお話でした。

もう、参禪二〇年にもなるのか?それでこの未熟さ?本当にいただく資格があるのだろうか?自問自答して悩むこと数日。有難く、ご老師のお慈悲に手を合わせた。

第二九回成道会の日、椎名老師より賜りし雄渾な墨蹟、

「隨他去」  
聞きなれない難しい言葉だった。さつそくリビングルームの正面に掛けた。その日から、「隨他去」と向き合う日々が始まった。

## 「隨他去」と禪の言葉をめぐつて

柏市 牧野 洋子

二〇一一年は、なんという激動の年であつたろうか。三・一一日、夫は入院中だつた。

その後自宅で療養し六月に他界。禪的生活をしているつもりの私は、震災も夫の死も世界の真実相のひとつとして、淡々と受け止めているつもりだった。が、参禪会はしばらく休んでしまつた。

そんな折、ご老師より深いお心のお悔やみの書状をいただいた。その中に、成道会の日、永年の参禪を讃えてくださる旨が記されてあります。

もう、参禪二〇年にもなるのか?それでこの未熟さ?本当にいただく資格があるのだろうか?自問自答して悩むこと数日。有難く、ご老師のお慈悲に手を合わせた。

第二九回成道会の日、椎名老師より賜りし雄渾な墨蹟、

「隨他去」

聞きなれない難しい言葉だった。さつそくリビングルームの正面に掛けた。その日から、「隨他去」と向き合う日々が始まった。

当日、ご老師より意味を伺つたのだが、舞い上がつていたのか、ほとんど覚えていない。

手持ちの禅語の本を何冊かめくつてみたが見当たらない。インターネットで厚い禅語辞典を購入し、調べたが見つからない。小畑さんによると、『従容録』と『碧巖録』の出典を教えてくださった。さらに、ご老師が『明珠』の「従容録に学ぶ」でご提唱されたことがあるので、というアドバイスがあり、一号から調べることにした。



「隨他去」と揮毫された額をご老師からいただいた牧野さん

その結果、平成元年の『明珠』一〇号第三

「隨他去」

読み||他に隨い去け

○則 「大隨劫火」に、真理と世界というテーマで、禪門で大いに参究された公案のひとつであると提唱されておられた。しかし、その中に出てくる「隨他去」の直接的な意味はよくわからない。

『明珠』の原稿を依頼された五十嵐さんに訊ねてみると、「世界の真理に従つていく。己を空しくしてそのあるがままに生きる」とのご教示。また駒澤大学の図書館の『従容録』を解説した書籍のコピーもいただきた。

「大隨劫火」の則には分からず屋の僧が出て来るが、それは私自身でもあつた。何人かの先達に聞きまくり、ここ一ヶ月間、『明珠』の「従容録に学ぶ」を読み返した。

『従容録』は中国禪の禅問答である。仏教

の専門家向きの書物であるから、難解なのは当然だ。それを椎名老師は分かりやすく解説され、日常の実践に活かされるように説き示されている。それでも私のようなボンクラ頭では十分理解できたとはいえない。『明珠』三〇号で小畑さんが仰せのように、繰り返し繰り返し味読しなければダメなのだ。

そうして新年会のとき椎名老師より、原稿用紙に書いたものを頂戴した。

と、真理、本来の面目などという言葉がすつと心の中に入ってきた。正に時機を得た有難いお言葉であつた。

また昔ご老師が言われた「茶碗は茶碗、箸は箸」、道元さんの「目は横に、鼻は縦に」「春は花夏ほどとぎす秋は月冬雪さえて涼しかりけり」、良寛さんの「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候」、お茶席の床に掛けた「明歴々露堂々」などという言葉も次々と思いつきこされた。

参禪会に通うようになつて、坐禅する一方、仏教の歴代のお祖師様の膨大で豊穣な言葉の海に投げ込まれた。

道元さんは「只管打坐」と言いながら、『正法眼藏』では、夥しい言葉を駆使して説法している。ご老師の言われるよう、坐禅とこれららの言葉の説法を学ぶことが、仏道修行の両輪なのだ。それによって、仏法のすばらしさを少しづつ体得出来たようだ。

新年会で、「ありがとう」という言葉」を、と私がまた余計なことを言つて、自己嫌悪に陥つてしまつた。【修證義】を開いてみると、

「四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事」、とあるではないか。また、「愛語といふは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を発し、顧愛の言語を施すなり：（中略）：愛語能く廻天の力あることを学すべきなり」。

さて振り返つて私は、二〇一年、大震災の被災者に、夫に、布施をしたか、愛語を施したか、利行をしたか。

また一方、「以心伝心」「拈華微笑」などという言葉もあるからやつかいだ。だからこそ仏法は味わい深く面白い。

椎名老師が心血を注いでいるご提唱が、己の血肉になるよう真摯に学びたい。そして、その言葉を日常の実践に活かしたい。

二〇年にして仏道の入り口に辿り着いただろうか。ともかく、すばらしい仏法に、よき師、よき道友のご縁をいただいたのである。感謝である。

これからもよろしくお導きくださいますよう、伏してお願ひ申し上げます。　合掌

## “時”と“参禅会”

柏市 杉浦 上太郎

私はあと一年数ヶ月で七〇代を迎えます。人生の第四コーナを、如何にして悔いのない“時”として歩むかを考える昨今です。

そのような折、『在家佛教』という月刊誌に掲載されていた、七七歳の仏教学者の講演録の中に、「自分の年齢を一二歳と考えることにした」というくだりがあつて、興味深く読みました。

その趣旨は、通常、年齢は加算法で数えるわけだが、これでは命が減るという実感がある。そこで逆算法で数えることにした。九

〇歳まで生きると仮定して、一二歳から始め、一二歳、一一歳、一〇歳と逆算して数えていくことにした。この方が時間をより大切にした生き方ができる、とするものです。

無常迅速 生死事大 衆善奉行 諸惡莫作

これは、龍泉院様本堂わきの渡り廊下の入口にある木版に墨書きされた偈文で、“時”的過ぎるのは誠に速い、無駄な時を費やしていく暇はない、只管修行に励めという諦めです。

両者とも“時”的大切さを説いていることに

は変わりません。

私の今までの“時”的の方は如何だった

のか少し省みてみます。長いサラリーマン時代、その後の某団体役員は、極めて多忙な日々でありました。家族サービスを犠牲にしながら、仕事と付き合い（遊び）に大きな“時”を費やしてきました。その絶対的な“時”的内、相当な割合で無為な“時”があつたと思われます。

私は四二歳のとき龍泉院参禅会にご縁をいただき、“時”的大切さを学んできたにも拘らず、現役を退くまで無為な“時”を減らすという改善を果たさなかつたと思います。

“時”を粗末にしてきた私は、一事が万事、日記をつける習慣も持つておりません。故に日常的に過去を振り返るすべがありません。ある時点、自分は何を考え、何をしていたか分からぬといふのは、不安なことです。

ところが、幸いにも私は最近、ふとしたことから、会報『明珠』が、自分の過去の“時”を蘇らせてくれるいわば『自分史』になつていることを発見しました。

自分自身の記述した内容から、記憶を辿ることができるのは当然ながら、有難いことは、他の会友さんとの相対的関係においても

時空を超え、その“時”的自己認識をすることができるのです。

例えば第二一号（平成七年四月発行）。同号は、阪神・淡路大震災特集号でした。震災地にボランティア参加した今泉房子さんの「震災の町から」、また、サリン事件に巻き込まれる可能性があつた五十嵐嗣郎さんの「通勤雑感」などを読むと、瞬く間に自分の“時”が蘇ります。

当時の私は、アメリカの会社と合併したばかりの新しい会社で、安全委員会の委員も職務とし、大阪の本社でサリン対策を真剣に討議していた様子がありありと思い出すことができるのです。他号においても然りです。

『明珠』は、僅か数頁の小冊子ですが、その誌面の陰に、全会員の人生の歩みに関する膨大な“時”（データ）が存在しているのだと思います。『明珠』は椎名老師の深いご垂示が魅力の「從容録に学ぶ」が縦糸となり、多くの会友の寄稿文が横糸、また大きな行事の記録が鮮やかな色彩となつて、それらが渾然一体となつて紡がれる織物なのです。

椎名老師および参禅会会友全員の念願でありました坐禅堂が建立なる本年、心新たに、性根を据えて、仏道修行に励む覚悟です。

そのためにも『正法眼藏』「有時」の巻の教え「今の自分を大切に生きる」ことを常に念頭におき、まさに“時”を“時”たらしめたいと念じております。

残年齢二歳の春の雑感までにて。（合掌）

## 良寛さんの俳句

流山市 添田 昌弘

参禅会で「良寛さんと出会う旅」を企画した際に、良寛さんに関する本を何冊か読んだ。旅行から帰つてからも、良寛さんの俳句に関するものを探しメモしておいた。大分メモがたまつたので、整理することにした。

良寛さんの俳句はあまり知られていない。しかし、小畠代表が時々、「焚くほどは風が持て来る落葉かな」なんて吟いているのを聴いて、他にどんな句があるのだろうかと思つた。和歌は一、三〇〇以上、漢詩は約四〇〇位

残されていると言われている。漢詩は「日本の漢詩人のなかで、最高の位置にあり」、和歌は「万葉歌人の柿本人麻呂に匹敵する」と云われるほど、よく知られている。それに比すると、俳句は余技的というか比較的身構え

じたままを表現している。  
俳句は残され確認されているものは一〇七句と言われている。和歌は貞心尼が『はちすの露』に整理している。漢詩は良寛さんの弟子で、良寛さんの晩年を世話した遍澄和尚が集めている。俳句については、誰も纏めていない。誰かに書いて与えた遺墨として残っているものや、写本として残されたものである。

また、良寛さんの父で俳人である以南の句を書き写したものが、良寛さんの句として収められたものもある。以南は「北越蕉風の棟梁」、「出雲崎俳諧中興の祖」とも言われる程の人であった。良寛さんの生き方に父以南の影響がかなり見られるのではないかと思うことがあり、二人の残した句を見ても共通するところが多いと言われている。良寛さんの俳句は、父以南の俳句を手本にしたのではない

かと思われる。

以南は死する時に一封の書を人に托し、「良寛という出家が訪ねて来る。そしたらこれを渡してほしい」と言つてそばの柳の木に吊るしてあつた。封書の中には、

朝霧に一段ひくし合歓のはな

夜の霜身のなるはてやつたよりも  
と書かれていた。良寛さんはこれを肌身はな

さず生涯所持していたという。良寛さん終焉の地の木村家に残されている。「朝霧に・」の句は以南の代表句とされているものである。この句の端に良寛さんは、「みづくきのあとも涙にかすみけりありし昔のことをおもひて」と一首を書き添えている。

良寛さんの俳句は「良寛とただ会っているだけで、心がなごみ、豊かになり、清められるような気がし、良寛が去った後でも、その残り香が家の中に残っているような、急ぐで任運自在の、優游たるもの」と『良寛禪師奇話』にあるとおりであろう。

### 新池や蛙とびこむ音もなし

芭蕉の「古池や蛙とびこむ水の音」の句を作り変えて諧謔と新鮮味を出そうとしたものである。良寛さんは芭蕉を大変尊敬し、『芭蕉』と題した詩を作っている。

この翁以前に この翁なく  
この翁以後に この翁なし

芭蕉翁

人をして千古 この翁を仰がしむ

和歌については何度も推敲されているが、俳句は即興的に作り、余り推敲されていない。それだけ束縛されずに、自由に句作されてい

る。良寛さんの書は評判も高まり、どうにか手に入れたいと周りから求められると、俳句を書いて与えることも多かつたようだ。

### われ喚て故郷へ行くや夜の雁

生まれ故郷の出雲崎を遠く離れて、仏道修行をしている良寛さんが故郷を思っている。母の死、父の衝撃的な死は、長男である自分が家督を放擲し、勝手に出来たことや、皆に迷惑をかけたことなどが心をよぎつていて。そうして、自分を故郷に連れて行こうとするかのように、夜の雁が鳴いて空を渡つて行く。

### 秋日和千羽雀の羽音かな

秋の日の越後平野を鳴き渡る雀の群れの羽音の物凄さに、良寛さんは心を動かしたのである。

良寛さん自身にとつても自信の句だったようで、遺墨が沢山残されている。代表作の一つと言われている。

### 焚くほどは風がもて来る落葉かな

この句はよく知られている良寛さんの代表的な句である。庵で煮炊きするくらいは、風が吹くときに運んでくれる落ち葉で充分間に合うことだ。山の暮らしは貧しくとも満ち足りている。

疑ふな六出の花も法の色

良寛さんが五合庵に定住してから三年後、一二歳の子を亡くした友に与えた哀悼句である。降りしきる雪は白く清らかで、仏の教えによつて必ず成仏することだろういうものである。その友人は良寛さんの生活を助け、和歌や俳句にも巧みで、親しくしていた。

雨宿りに飛び込んだ家で、家主はこの機会にと接待し、筆と白扇を差し出し書を頼み、戸を閉じてしまつたという。

### 雨の降る日はあはれなり良寛坊

この句には季語が無い。



五合庵の句碑「焚くほどは風がもて来る落葉かな」

逸話では、長岡藩主牧野忠精が城下に寺を作つて、良寛さんを招聘しようとして、良寛さんの庵に尋ねつていったが、良寛さんは無

言のままこの句を示したという。

この句には類似の句があり、蕪村の「西吹けば東にたまる落葉哉」や一茶の「焚くほどは風がくれたる落葉かな」などがある。偶然の一一致か、たまたま頭にあつたのが無意識に詠んだのか。それとも意識的に本歌取りとしたのか。

「五合庵の近くにこの句碑がある。そこには、  
〔堂久保登盤 閑勢閑毛天久留 於知者可難〕

と書いてあつた。

鉄鉢に明日の米あり夕涼

良寛さんの漢詩の一節に、「囊中三升米、  
炉辺一束薪」がある。袋の中には托鉢でもらつた三升の米があり、囲炉裏には山から取つてきた一束の薪がある。これで満足だ、とうのである。

君来ませいが栗落道よけて

良寛さんの庵を訪れた庄屋の阿部定珍の帰る道を思いやる気持ちと、辞去を惜しむ心が感じられる。良寛さんが記していた父以南の句中にあるもので、以南の句かもしれない。むしろ、この以南の句に影響されたと思われ

る良寛さんの和歌がある。

「月よみの光を待ちて帰りませ山路は栗の  
毬の落つれば」

盜人にとり残されし窓の月

「五合庵へ賊の入りたるあとにて」という

詞書がある。無一物の良寛さんの庵にも何度も盜人が入つたようだ。盗みに入つたが何もいる着物に目をつけ、袖を引っ張つた。良寛さんは手を引っ込めて盜人に着物を与えたという。盜人が帰つた後、外を眺めると月が明るく輝いていた。

日日日に時雨の降れば人老ぬ

降りつづく時雨で侘しい日を送つてゐるうちに、何となく老けてしまつたように、また衰えたように見えるという。

あきかぜに一人立ちたる姿かな  
自画像であろう。

おちつけば此處も廬山のよるの雨

これは中国の白居易の詩にある、「廬山の雨の夜草庵の中」と詠んでゐるように、他に煩わされることなく、独り静かに暮らして行けるよい場所だという。

良寛さんの詩に、

回首五十有余年

是非得失一夢中

山房五月黄梅雨

半夜蕭蕭灑虚窗

これも白居易の影響が見られる。

ほろ酔のあしもと軽し春のかぜ

良寛さんらしく、面白い。

この人の背中に踊りできるなり

これには前書として、「与板町山田氏に肥大なる下婢の竈を焚きて居るを見て」とある。山田家の女中およしさのことである。およしきは良寛さんの冗談相手で、良寛さんは彼女から酒をふるまわれたり、良寛さんが日暮れに訪れるので、董と綽名をつけたりした。また盆踊りの女装の衣装を借りてもいる。

芭蕉の句に「春なれや名もなき山の薄霞」、斗入の句に「初時雨名のつくまでのおもしろき」がある。良寛さんはこの両句が頭にあって作ったのかもしれない。ありふれた山で名もないが、木の葉が落ち尽してた山に時雨が降るありさまは、何となく心ひかれる。

倒るれば倒るるままの庭の草

良寛さんの最晩年の句である。この年の暑さは記録的なものであつた。この暑さで庭の草は枯れかかって倒れてしまい、起き上ろう

ともしない。良寛さんもこのとき、体調を崩してしまった。

文政一三年七月から病に臥して、一〇月の一時、小康状態を経て、一二月に危篤状態になり、翌天保二年の正月六日に亡くなる。この句は死を目前にして病の日々の感慨といえるものである。

良寛さんの臨終に立ち会つたのは、世話になつてゐた木村家の人達と貞心尼、そして遍澄和尚だった。弟の由之が駆けつけ、弟の顔を認めるのがやつとだつたという。物も言えなかつた。弟が到着して間もなく良寛さんは息をひきとつた。

貞心尼の『はちすの露』に「こは御みずからのみはあらねど、時にとりあひのたまふいとたふとし」と死期の迫つた良寛さんが、貞心尼につぶやいたという句が、

うらを見せ表を見せて散る紅葉

である。

相馬御風の著『大愚良寛』には「良寛禪師重病之際、何か御心残りは無之哉と人問ひしに、死にたうなしと答ふ。又辞世はと人問ひしに、

散る桜残る桜もある桜

と記している。この句が辞世の句ということ

になるが、良寛さんの最後を看取つた人達に、この句の記録は無い。

作家の水上勉氏は、良寛さんを解説した文の最後に、「禅宗の坊さんで、寺を持たず、まことしやかな語録も残さず、弟子ももたず、歌を詠み、詩を作り、村童と遊び暮らしそうと讀書に暮らし、人に会つても威張つたところがなかつた。七四歳の生涯を閉じるに真宗寺に眠つた。不思議な人である。この人にあまたの禅僧に感じられる冷たさがない。

どういうわけだろう。たぶん人を愛した人なだと私は思う。そうでなければこの温かさは伝わつてこない。こんなあたりが好きなのである。遺偈もない。戒名もない。俗離といえば軽く、偏屈といえば違う。曠古以来の人とたふとし」と死期の迫つた良寛さんが、貞心尼につぶやいたという句が、

良寛さんの俳句は何の束縛もなく、思いのままに作つたもので温もりを伝えている。これまで書いてきた句以外に私の良寛さんの好きな句は次の通りである。

山里は蛙の声となりにけり

雪しろの寄する古野のつくづくし  
山は花酒屋酒屋の杉ばやし

同じくば花の下にて一とよ寝む  
夏の夜やのみを数へて明かしけり

萩すすきわが行道のしるべせよ  
杯をほしてながむるあき日和

悠然と草の枕に秋の庵  
秋高し木立は古りぬ籬かな  
のつぼりと師走もしらず弥彦山

## 「四弘誓願」の真髓

我孫子市 清水 秀男

衆生無邊誓願度（衆生は無邊なれど誓つて度せんことを願う）

煩惱無尽誓願断（煩惱は無尽なれど誓つて断たんことを願う）

法門無量誓願学（法門は無量なれど誓つて学ばんことを願う）

仏道無上誓願成（仏道は無上なれど誓つて成ぜんことを願う）

以上の「四弘誓願」は、日本仏教のほとんどの宗派で読經の終わりに唱える願文で、宗派によつて字句に多少異同があるが、曹洞宗、臨済宗では上記の表現内容になつてゐる。原型は『大乗本生心地觀經』等に見られ、右記の様な願文の形にしたのは中国南北朝時代の天台大師で、『摩訶止觀』に見られる様である。

私は、「般若心經」と共に朝晩唱え、朝は、「四弘誓願」の真髓に、未熟ながら一步でも半歩

でも近づけるべく今日の誓いの意味で、夜は真髓に程遠かつた懺悔と反省を込めて、唱える願文である。

「四弘誓願」は、簡潔な願文ながら、意味していることは深遠である。まず簡単に各々

の句を私なりに解釈し、その意味している所を見ておきたい。

最初の第一句に「衆生無辺誓願度」を置き、自分より先に、まず無辺の一切の衆生（＝生きとし生けるもの）を救いたい、という慈悲心から溢れ出る大誓願を掲げ、それが仏教修行者にとって一番肝要であるとしている。

次に「衆生無辺誓願度」を実現するためにはべきことは「煩惱無尽誓願断」、即ち尽きることのない煩惱熾盛の自己を見つめ、その過度な煩惱を静め、滅却すべく精進し、修行に励む誓願を第二句に掲げている。

そして第三句には「衆生無辺誓願度」に向つて眞の智慧と勇氣を得るべく、限りない仏法の教えを学び・努力し・成就しようとする誓願「法門無量誓願學」が不可欠としている。そして、それら三つの誓願を実践することによつて、人々と共に平和・安寧な社会、無上の仏国土建設を完遂しようとするとする誓願が、第四句の「仏道無上誓願成」である。

この「四弘誓願」の中で一番重要なポイントは、第一句に「煩惱無尽誓願断」ではなく「衆生無辺誓願度」を掲げていること、即ち自利よりも利他を第一の誓願としていることである。

法華經信者であつた宮沢賢治の「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はあるえない」の言葉は、「衆生無辺誓願度」の精神を踏まえたものであり、利他の極致を表したものと言えよう。

ここで、どうして利他が自利に優先しなければならないのかについて、考えてみたい。

この場合「他」（衆生）とは、自分以外のすべてのものであるが、大きく分けて三つの「他」がある。第一は、他人という個人としての「他」。第二は、各個人が形成する社会集団としての「他」。第三は、自然（動植物や環境）としての「他」である。

この三つの「他」の恩恵によつて、我々は初めて自分の生命が維持され存在しているのであって、決して自分一人では生きていくことが出来ないのである。その意味では、我々は自分で「生きている」と思つてゐるが、それは大間違いで、「生かされている」というのが眞実の姿であることを、認識しなければ

ならない。

この様に「他」によつて「生かされている」という厳然たる事実が、利他が自利よりも優先して考えられなければならない最大の理由である。

そして、「生かされている」という眞の目覚めがあれば、自ずと「他」への報恩・感謝の念が起こり、「他」にお役にたつべく、利他

の心と行動－慈悲心－が自然と湧き出てくる。

その慈悲心は、「思いやり精神」と「勿体ない精神」の発露の形で具現化していく。また慈悲心を考える時、有名な宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩の一節、「アラユルコトヲ／ジブンヲカンジョウニ入レズニ」が常に脳裏に浮かんでくる。そして、その慈悲心の発露によつて、「他」が救われると共に、自身も救われ、人間的にも成長し、向上していくのだと思う。

思想家の内田樹氏は「人間がその才能を爆發的に開花させるのは、「他人のため」に働くとき：人の役に立ちたいと願うときこそ、人間の能力は伸びる」と主張している。

また、東日本大震災でボランティア活動をした人々が、異口同音に「被災者の方々から、逆に元気を貰い、癒された」と語つてゐるの

は、このあたりの消息を示している一例でもあろう。

次のポイントは、「四弘誓願」の第二句の「煩惱無尽誓願断」と第三句の「法門無量誓願学」の自利の誓願は、「衆生無邊誓願度」のための誓願、即ち自分のためだけの煩惱滅却の修行と仏法の学びではなく、あくまで衆生（他）救済のための自己修行であり学びの誓願を示していることである。

最後のポイントは、第一句、第二句、第三句を踏まえ、最終の目標として、生きとし生けるものと一緒に、平穀で平和な争いのない幸福な社会を創るべく、精進努力しましようと言っているのが、第四句の「仏道無上誓願成」の誓願であろう。

以上から見て、「四弘誓願」の真髓は、「衆生無邊誓願度」に始まり、「衆生無邊誓願度」に帰着すると言つても過言ではないと思う。私は、現在の小康を得るまで、大小合わせ八回の手術を含め、闘病生活四年を数えたが、病縁によって初めて、本当に多くの人々と物のお蔭で「生」があり、「生かされている」との有難さを実感した。

傲慢にも当たり前と思つていた事柄の背景には、多くの授かりと恵みがあることを、病

気と言う逆境を通じて、気づかせて頂くことができたことは、有難いことであり、逆に病気に感謝せねばならない。この経験を財産として、与えられた残る人生を「四弘誓願」の真髓をかみしめ、少しでも社会にお返しをする生活をし、生を全うしたいと思っている。

最後に、瀬戸内寂聴尼の言葉を味わいながら、筆を擱く。

「生きるとは、自分の存在が誰かの役にたち、他者を幸福にすることです」。以上

## 写真とところ（四）

### ■今や写真はデジカメ時代

取手市 三町 勲

写真業界はデジカメ一色で写真はデジカメ時代になっています。私の写真歴の十数年の間にフィルムカメラから一転してデジカメに切り替わってしまいました。もう今日では我々のクラブの撮影会でも殆どがデジカメ撮影になってしまっています。そこで今回はデジカメについて触れてみたいと思います。

### ■デジカメ画面は点描派の絵画

デジカメの話になると、一九世紀後半の点描派の絵画を想い出します。筆でエノグを塗るのではなく、細い筆の先でエノグを落とし



日本ではかの有名な山下清画伯も点描派画家の作品を遺しています。山下画伯の「パリのノートルダム寺院」（一九六一年作・左頁写真）がその一例です。大変根気のいる緻密な作業が要請されます。

デジカメ写真はこの点描派の絵と同じ原理です。粗つた写真的画面は多数の点で成り立っています。それが我々がよく耳にする「画素数」という言葉です。画素数が大きければ一枚の写真の中の点の数が多く、細かくなめ



### ■ 画像サイズは撮像素子のサイズ

らかな画像が記録できます。デジカメファン

が挙つて画素数を気にするのもこのためです。

ファイルムカメラは35ミリであれば、 $36 \times 24$ ミ

角の中に画像を作りますが、デジカメの場合

はCCD(カメラ内部の撮像素子)に画像を

記録します。CCDは一般に大きいもので23×

15ミ角(APS-C型)です。私が展覧会出

品用に撮影するカメラは、ファイルムカメラの

ペンタックス645ですが、 $60 \times 45$ ミ角の中

判フィルムを使用します。最近ペンタックス

645D( $44 \times 33$ ミ角)というデジカメが発

売されていますが、4000万画素です。我々

### ■ ピクセル数が大きい程、解像度が高い

CCDの機能は伝光掲示盤を想い出して戴

ければよく分かります。600万画素デジカ

メでは、3000(横) $\times$ 2000(縦)列にランプが配列されている。全部のランプの数は600万個ありますことになります。同様に

1000万画素では3873(横) $\times$ 258

2(縦)列にランプが配列され、全部で1000万個ありますことになります。これらのラン

プは色や濃度が変化しますから、伝光掲示盤よりかなり高度な機能を持つたものです。

これらのランプ一個は1ピクセルと呼びます。ピクセル数が多い程、撮った写真の解像度が高くなり、写真を大きく引き伸ばした時に美しく鮮明なプリントが得られます。

### ■ デジカメは写真の「ぼかし」に難点

「限りなく鮮明さを究尽する」デジカメにも弱点があります。それはファイルムカメラで生まれた「ぼかし」いわゆる「前ぼけ」技術が取り込めないことです。「前ぼけ」によつて背景をひきたてるテクニックが難しいことです。このようにファイルムカメラとデジカメの良し悪しは色々ありますが、これらは撮影者の「写真を撮るときの意識」や用途の違いにより仕分けしなければなりません。ファイルムカメラであれデジカメであれ、それぞれの特質

を生かした撮り方が撮影者の固有技術です。禅の世界の覚りの究尽において「見性禅」

か「修証」等禅を選ぶかは、参禅者の機根の違いによるものと符合するのではないでしょうか。

### ■ デジカメ特有のホワイトバランス機能

撮影後、即座にカメラの液晶モニターでも見えますが、プリント仕上げするには、デジカメは撮影からパソコンに取り込んで写真の画像処理・編集に至るまでデジタル信号で対話形式で行われます。最終的にプリントされる段階で、撮影された写真の正体が目に見える形で表されます。

これらの工程で、我々の目に見えないものが沢山あります。その一つが「ホワイトバランス」です。光源が変われば色が変わる(ファイルムカメラも同じ)。つまり、カメラは光源や周囲の色を敏感に感じ取つてしまいます。これを「色かぶり」と呼びます。代表的なものは朝夕の「赤かぶり」、雨天の「青かぶり」、蛍光灯の光源の「緑かぶり」、白熱灯の光源の「強い赤かぶり」などがあります。

「色かぶり」はカメラのホワイトバランスの設定と、撮影場所の光に含まれる色とのギャップによって起ります。ホワイトバランスは様々な光の状況下で、白い被写体を白く写すためのデジカメ特有の設定機能です。これ

らの基準は「色温度」という、光の色味を人間の主観でなく温度にたとえて、客観的に表現する数値です。青天の太陽光の色温度の5000～5500ケルビンを、基準として数値化され基準化されたものです。

### ■限りなく進化するデジタル技術

デジカメは撮影する技術もさることながら、カメラの中で写真を編集する技術も実用化されています。例えば、夕日が洋上に沈んでいく風景に、遊子が乱舞する情景を張付けて、作品を創作することができるのです。現在のIT技術の進歩の産物です。

「遙かなる仏道」と言われる道元禪の進化を想い出させます。道元禪師の『正法眼藏』『山水経』の「青山常運歩」の自然観は、デジカメの世界にも、何れ融合するのではないかと迷想することもあります。

もともと、写真は肖像画の下絵として生まれたのですが、二〇世紀に入つて報道写真として大いに活かされました。デジカメになつて通信技術と接合し、迅速に正確に映像を転送する役割はより大きくなっています。

写真の芸術性の狙いとは、「宇宙にこぼれ落ちたものを掬い取り、人間の情念に問いかけ、見る人の情念を鼓舞する」という理念か

ら、撮影者の意識が写真の価値觀を生むということを改めて痛感します。日々進歩する写真機材や撮影技術に関係なく、撮影者の撮影の目的や意識が確りとしていなければ、良い写真になりません。

(次回に続く)



## 年末托鉢

去る一二月一七日、曹洞宗千葉県第一教区の恒例行事となつてゐる「歳末助け合い」募金活動が行われました。龍泉院参禪会からは、椎名老師のもと、加藤孝さん、永野昭治さん、小山齊さん、鈴木民雄さん、田上淳一さん、杉浦上太郎の七名が参加しました。

一二時三〇分、柏駅近くの長全寺様に集合。一三時一五分、僧俗合わせ約二〇名が般若心経をお唱えして、いざ出発。柏駅前、東口コンコースに陣取つて募金活動を開始。

同コンコースは、チラシを配る人、犬の里親探しのボランティア、チーム、大道芸をする人、それを囲んで歓声をあげる人、忙しげに行きかう人等で溢れ、ともすれば埋没してしまいそうな環境下ではありましたが、無

心に托鉢行をさせていただきました。

数名の当会会員の喜捨も受けつつ、午後三時三〇分に終了。長全寺様で温かいうどんの接待を受けて解散となりました。

喜捨いただいた寄付金の合計金額は七万余円のこと。これは公益団体に託し、社会に役立てていただくことになっています。修行の機会を得たことに感謝。

(杉浦 記)

## 地鎮式

坐禅堂の地鎮式は、二月五日午前九時五〇分より一〇時二〇分まで、椎名老師導師のも

と、株式会社工匠堂渡辺社長、有限会社増田測量設計増田社長に参禪会の皆様と計一六名の参加を得て、厳肅に執り行われました。この日は天候に恵まれましたが、気温が大変低く、参列している間約三〇分でしたが、足が冷たく凍えそうな感じでした。竹を四本立てられた祭場には、お神酒、米、根菜、果物などが供えられて式が始まりました。

地鎮式の差定は、次の通り進められました。拈香法語 → 普同三拜 → 般若心経諷誦(三辺) → 消災呪(三辺) → 焼香 → 鍵入れ → 献杯

地鎮式は、坐禅堂建築にあたり基礎工事に



鍬入れをする小畠さんと渡辺社長

## 新年会

今年も例年通り二月五日午後一時から、柏市呼塚の「うどん市」で新年会を行いました。椎名老師以下二十四名の参加となりました。杉浦さんと今年の年番幹事の山本聰さんのお二人の司会で、最初に椎名老師のご挨拶があり、次いで中鳴さんのご発声による乾杯をへて、歓談に入りました。

一段落の後、全員のスピーチが始まり、それぞれの普段考えていることを述べました。和やかなうちに推移し、あつという間に限られた時間が過ぎ、老師からのお年玉を、ジヤンケンで何人かが頂き終了しました。

今年は坐禅堂の建設も始まり、参禪会も新しい年を迎えることになります。その縁を確かめる会になつたと思います。 (添田 記)

なお参加者は、当日は八時からお集まりを頂き、参禪会有志が般若心経を一文字づつ写経した鎮め物の石に、経文番号を付す作業を致しました。

地鎮式終了により、基礎工事が着工され、記念する坐禅堂建築が着々と進められることになります。皆さんで無事に坐禅堂建築が進むことをお祈りしましょう。 (松井 記)

の臨終を悲しんで慟哭している佛弟子や動物たちが描かれています。

因みに日本で最初に涅槃会が行われたのは、一四〇〇年ほど前の推古天皇の御代で、宮廷で執り行われたそうです、また、日本に現存する最古の涅槃図は応徳三年(一〇八〇)に制作されたもので、高野山にあり、国宝に指定されています。その涅槃図では釈尊は仰向けに横たわられており、動物は師子一匹だけが描かれているそうです。

梅花講による大聖釈迦如来涅槃御和讚が詠ぜられる中、ご老師を導師とする一行が入堂しました。毎回維那を務められる小畠代表幹事が所要のためご欠席になられたので、杉浦さんが初めて維那を務められました。また侍者は添田さん、侍香は小畠二郎さんが務められました。

ご老師が入堂され、涅槃会についての法語が述べられ、続いて『般若心経』一巻を全員で諷誦いたしました。

涅槃会の法要の後、ご老師からお茶とお菓子をいただき、しばらく歓談した後、坐禅を一炷組んでから帰宅しました。

(五十嵐 記)

## 涅槃会

三佛忌(降誕会・成道会・涅槃会)の一つ

である涅槃会が、二月一五日午後二時から龍泉院本堂で行われ、参禪会からは八名の方が参加しました。本堂の右側には大きな涅槃図が掛けられており、娑羅双樹の下で頭北面西に横臥した釈尊を中心とし、その周囲には釈尊

## ◇◇会員便り◇◇

●坐禅堂建立にあたって、鎮め物として那智石に『般若心経』を写経しましたが、那智石を納める壺を三町さんがご用意して下さいました。壺は筑波山の麓で焼かれた「つくばね焼き」で、窯元の梅田八主守さんが制作されたものです。

●坐禅堂建立にあたって、坐禅堂建設委員会が精力的に行われ、最近では九月二十五日(八名)、一〇月九日(七名)、一〇月三二日(工事契約で四名)、一二月四日(九名)、一月二二日(一〇名)、二月二六日(九名)と、六回開催されました。また、四月二九日(日)に坐禅堂上棟式が行われる事になりました。

## 沼南雑記

### 【定例参禅会・年間行事】

( ) 内は座談の司会者

新年会 「うどん市」  
於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

### 平成二三年

一月二五日

(五十嵐嗣郎氏)

二九名

(中嶋 宏誠氏)

### 一月一五日

涅槃会

三三名

(石原 良浩氏)

### 二月二六日

行 / 天徳山龍泉院 千葉県柏市泉

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

山本 聰氏

八名

新規会

「うどん市」

於 「うどん市」